

2018年5月20日（ペンテコステ礼拝）の説教（要旨）

聖書 ガラテヤの信徒への手紙4章1～7節

説教 「御子の霊をいただいて」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ペンテコステとはギリシア語で 50 日をあらわす言葉ですが、主イエスの復活後 50 日目、ユダヤで五旬祭という祭りが行われていた時に、エルサレムに集まって祈りをあわせていた弟子たちに聖霊が注がれました。この出来事は旧約の預言と主イエスの約束の成就でした。その時から弟子たちは力強く主イエスを宣べ伝え、地上に主の教会が誕生したのです。

あのペンテコステの日の豊かな聖霊の注ぎは、今ここに集められている私たちと決して無関係なものではありません。使徒たちに注がれたのと同じ霊が、私たちにも確かに与えられているのです。霊は風のようなものです。実際、ギリシア語で霊と風はいずれも同じプネウマという言葉です。風には木々をなぎ倒すほどの突風もあれば、静かに頬をなでていく風もあります。霊の動きも同じように多様で豊かです。私たちは、聖霊が確かにこの私にも注がれているのだという恵みを覚えて喜び、その恵みに応えていきたいものです。

パウロはガラテヤの信徒への手紙4章6節で「あなたがたが子であることは、神が、『アッバ、父よ』と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります」と書いています。私たちにも与えられている聖霊のことが、「アッバ、父よと叫ぶ御子の霊」と呼ばれていることに注目したいと思います。

「アッバ、父よ」という主イエスの言葉は、そのままの形では一箇所だけ、ゲツセマネのあの激しい祈りの場面に記されています。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」（マルコ 14：36）。けれども、主イエスはこの呼びかけを日々の祈りの生活においてもしておられました。「アッバ」とは、当時使われていたアラム語で「わたしの父」という意味の言葉ですが、お父様とかお父上とといったかしこまった言い方ではなく、「パパ」とか「お父ちゃん」というような幼い子どもが全く信頼して口にする言葉だったそうです。当時のユダヤ人の祈りの習慣の中にもないユニークな言葉遣いでした。

しかし、もっと驚くべきことには、主イエスのご自身が天の父と呼ばれたその呼び方をご自分だけの専用語とはなさらずに、私たちも使ってよい言葉として教えてくださったのです。本来の神の御子である主イエスが、神に逆らい、神を父と呼ぶ資格のない私たちにも、天の神を「アッバ」と呼べばよいのだと教えてくださったのです。

なぜ、私たちが神を父と呼ぶことができるのでしょうか。それを可能としたのは主イエスのご生涯と御業でした。「時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは律法の支配下にある者を贖い出し

て、わたしたちを神の子となさるためでした」(4~5節)とあります。御子が私たちの罪を贖ってくださり、私たちに神との和解と交わりを与えてくださったからです。

では、どのようにして、私たちは神を父と呼ぶことができるようになったのでしょうか。それは私たちを受け入れてくださった神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を私たちの心に送ってくださったからです。子たる身分を与えられた私たちは、神によって、神との特別な絆で結ばれるようになったのです。復活された主イエスは天に上げられましたが、それに代わって神は御子の霊を私たちに送ってくださり、私たちを生けるキリストと結び合わせてくださったのです。それは教会生活をする中でいつ知らず始まり、私たちが信仰を言い表し洗礼を受けるという形で確かに実現し、さらに祈るたびに、礼拝するたびに、信仰生活を進める中で深められていくのです。御子の霊をいただいて、私たちはイエス・キリストと固くつながれていくのです。カルヴァンは「聖霊はキリストがそれによって私たちを御自分と結びつける絆である」と言っています。

信仰を与えられた私たちですが、地上を歩む間はたえず迷いと悩み、誘惑と試練の中にあります。しかし、そこで「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊が与えられているということはなんと幸いなことでしょうか。パウロは、ローマの信徒への手紙8章25~26節で、「同様に、霊も弱い私たちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、霊自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです」と書いています。そして、ルターは『ガラテヤ書注解』の中で、そのパウロの言葉を引いて次のように書いています。「自分の目の前に自分の罪以外なにもものも見えない。聖書を読んでも自分を慰める言葉とはならず、キリストも顔をそむけておられるようにしか思えない。そんな時、地面に打ち倒れて祈ることもできなくなる。だがこの時彼の口から小さなうめき声もれる。それは苦しむ彼のうめきの小さな声で、その声は彼の耳にさえ聞こえないほどである。だが、このうめきは『アッバ、父よ』という叫びとなって天にまで届く。それは天上で雷鳴にもまさって鳴りとどろき、力強い呼びかけとして主なる神に聞き届けられ、主は彼の子どもであるキリスト者を助け起こされる。なぜなら、『アッバ、父よ』とわれわれを祈らせ、われわれを助けられることは、聖霊による主ご自身の御旨であり御業であるからだ」と。

聖霊は私たちを御子キリストとしっかりと結びつけてくださる絆です。主イエス・キリストによってすでに御子の霊をいただいている私たちです。だから、私たちは天の神を「父」と呼んで生きることができるのです。そのようにして、私たちの信仰の旅路は終りの日に至るまで守られ、導かれるのです。